

Title	fat talk生起プロセスに関する質的研究
Author(s)	高村, 愛
Citation	人間文化創成科学論叢
Issue Date	2017-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10083/61071">http://hdl.handle.net/10083/61071</a>
Rights	
Resource Type	Departmental Bulletin Paper
Resource Version	publisher
Additional Information	

This document is downloaded at: 2017-11-19T07:00:46Z



Ochanomizu University

## fat talk生起プロセスに関する質的研究

高 村 愛\*

### A qualitative study on process of engaging fat talk among Japanese women

TAKAMURA Ai

#### Abstract

Body dissatisfaction is not only one of risk factors of eating disorder and unhealthy weight control but also correlates of depression and low self-esteem. In recent years, fat talk is attracting attention as interpersonal communication which elevates body dissatisfaction. Fat talk is communication about weight, body size, and exercise among women (e.g. “I’m so fat!”, “This cake looks fattening!”) In the present study, we interviewed 10 undergraduate women about their fat talk engagement. Modified grounded theory approach was used to analyze the process model of fat talk. Results showed that women engaged in fat talk as a gossip but some women engaged in fat talk because of their worries about their own bodies. These two backgrounds make listener confused so that listeners feel discomfort when they heard friends’ fat talk. In addition, results showed that friends’ responses to fat talk such as “You are not fat.” made speaker feel relieved. Therefore, speakers engaged in fat talk when they seek for friends’ support. Furthermore, women heard fat talk felt pressure to be thin regardless of speaker’s backgrounds of fat talk. Negative effects of fat talk on body dissatisfaction and depression are discussed.

Keywords : Fat talk, Drive for thinness, Co-rumination, Interpersonal communication, Modified Grounded Theory Approach

#### 問題

今日の日本では、多くの研究によって、女性の7～9割が身体不満を感じていることが明らかになっている(半藤・川嶋, 2009; 松坂・中山・古屋・山内・高松, 2013; 荻布・蓮井・細田・山本, 2006)。身体不満は摂食障害の発症(Stice, 2002; Striegel-Moore & Bulik, 2007)や不健康な体重コントロール(Neumark-Sztainer, Paxton, Hannan, Haines, & Story, 2006)につながるだけでなく、抑うつ・自尊心(Paxton, Neumark-Sztainer, Hannan, & Eisenberg, 2006)や喫煙(Stice & Shaw, 2003)といった問題との関連が指摘されている。

身体不満は身体的・心理的健康に悪影響を及ぼすことから、多くの研究が関連要因について検討を行っている。身体不満の背景には、「痩せていたほうがよい」という社会文化的価値観が存在しており(Rodin, Silberstein, & Striegel-Moore, 1984)、Stice, Schupak-Neuberg, Shaw, & Stein (1994)は、この価値観をとりこむことを瘦身理想の内面化と称した。瘦身理想の内面化と身体不満を引き起こす過程の代表的なモデルとして、tripartite influence model(Thompson, Heinberg, Altabe, & Tantleff-Dunn, 1999)があげられる。メディア・親・友人の3つの社会文化的要因への暴露は瘦身理想の内面化や社会的比較を通し、身体不満や食行動の問題につな

---

キーワード : fat talk, やせ願望, 共同反芻, 対人コミュニケーション, 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

\*平成27年度生 人間発達科学専攻

がるとするものである。

Tripartite influence modelは多くの研究によって実証されている。Yamamiya, Shroff, & Thompson(2008)が日本人女子大学生を対象に質問紙調査を実施した結果、メディア・親・友人は瘦身理想の内面化と社会的比較を媒介して身体不満、食事制限、食行動異常へ影響を及ぼすモデルが支持されている。痩せるべきという価値観は日本人女性においても根強く、身体不満や関連疾病へ影響を及ぼしているといえるだろう。実際に、我が国における20歳代女性のやせ(BMI<18.5)は2割程度、成人女性全体では10.4%であり、10年間で有意に増加している(厚生労働省, 2015)。特に、若年女性におけるやせが問題視されており、貧血や疲労(重田・笹田・鈴木・榎村, 2007)、骨粗鬆症(甲村, 2010; 曾我部・丸山・佐藤・五関, 2009)などへの影響が指摘されている。

近年、身体不満へ影響する対人的やりとりとして、fat talkが着目されている。Fat talkは、友人や家族との間で生じる体重・体型・エクササイズ等に関する会話であり(Arroyo & Harwood, 2012)、太ることに対する嫌悪・抵抗を示す内容が含まれる。「私は太っている」、「これを食べたら太るだろうか?」といった内容が代表的である。主に女性の間で起こる会話であるが(Payne, Martz, Tompkins, Petroff, & Farrow, 2011)、男性においても起こることが確認されている(Engeln, Sladek, & Waldron, 2013)。多くの研究により、fat talkが身体不満に影響を及ぼすことが明らかになっており(Ousley, Cordero, & White, 2007; Warren, Holland, Billings, & Parker, 2012; Sharpe, Naumann, Treasure, & Schmidt, 2013)、否定的な身体像への介入アプローチとしてfat talkをやめさせる取り組みも行われている(BodyImage3D., 2013; Garnett, Buelow, Franko, Becker, Rodgers, & Austin, 2014)。fat talkは、tripartite influence modelにおける友人や親の影響と重複する概念と捉えることが可能であると考えられるが、自分自身も発話し、相互に会話のやりとりがある点で、友人・親の発言への暴露や体型を指摘されることとは異なる側面があるといえるだろう。

さらに、fat talkは、単純に身体不満を持っている女性が参加するだけでなく、別の理由による参加も示唆されている。Nichter(2000)は、10代の女子に対するインタビューから、fat talkを儀礼的会話(ritual talk)であるとし、文脈や社会的関係を見ることが重要であると述べている。例えば、fat talkに従事することは「自分は完璧ではない」と表現することであり、結果として友人グループ内での仲間の結束を強める機能があることが指摘されている(Nichter, 2000)。このように、fat talkはただ身体不満を表現する会話であるだけでなく、文脈や社会的関係と関連した会話であるといえる。こうした、自己や仲間の欠点に着目するという特徴は、精神的健康に悪影響をもたらすと考えられている。fat talkは、参加者が受動的にお互いのボディイメージの問題について話しあうが、積極的に問題解決に向けての努力をしておらず、共同反芻(co-rumination)であるとの指摘がなされている(Rudiger & Winstead, 2013)。共同反芻とは、自分自身の悪いところに着目して繰り返し話すコミュニケーションであり、抑うつ・不安等への悪影響が指摘されている(Rose, 2002; Stone, Hankin, Gibb, & Abela, 2011)。

このように、fat talkは、身体不満を持つ女性のみが従事するものではなく、社会的関係や文脈と関連し、多くの女性が日常的に従事している会話であると考えられている。しかし、fat talkへの日常的な従事は、身体不満のみならず(Ousley et al., 2007; Warren et al., 2012; Sharpe et al., 2013)、共同反芻による抑うつ・不安傾向の増大(Rose, 2002; Stone et al., 2011)などの悪影響が指摘されている。したがって、fat talkに関わる要因やfat talk従事の背景の探索により、効果的な予防的介入の開発に対する有効な示唆を得られるのではないかと考えられる。

本研究では、fat talkの生起プロセスについて探索することを目的とし、半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析する。日本におけるfat talkに関する研究は少なく、本研究で質的データを分析することにより、実際の会話例などの詳しい情報を得ることが可能となり、今後の研究の基礎となる知見となるのではないかと考えられる。また、木下(2003)によれば、グラウンデッド・セオリー・アプローチは「人間と人間が直接やりとりをする社会的相互作用に関わる研究」(p.89)に適しているとされ、対人的やりとりであるfat talkの生起背景を探索するために適していると考えられた。

## 方法

**対象者** 東京都内に位置する大学に在籍する女子大学生10名を対象とした。平均年齢は20.00歳( $SD=1.34$ )、

平均BMIは20.25 ( $SD=2.40$ ) であった。研究参加者募集に関する書面を作成し、授業終了後に配布および学内に掲示を行った。参加希望の学生は書面記載のURLにアクセスして研究参加への応募および食行動に関する質問に回答した。本研究では、非臨床群におけるfat talk生起プロセスを検討することが目的であったため、参加者募集時に日本語版EAT-26 (Mukai, Crago, & Shisslak, 1994) への回答を求め、異常な食行動の傾向がみられない者のみを対象とした ( $M=7.00$ ,  $SD=3.55$ )。EAT-26は最高値が78点であるが、中井 (2003) をもとに、本研究でのカットオフ値は15点とした。参加者の一覧を表1に示す。表中に示した運動習慣については、面接中に会話内で得られた情報をもとに記載した。

表1. 参加者一覧

ID	年齢	性別	BMI	EAT-26	運動習慣の有無
A	18	女性	17.44 (やせ)	2	無
B	21	女性	21.16 (標準)	9	運動部所属
C	19	女性	19.11 (標準)	9	無
D	19	女性	24.97 (標準)	6	無
E	20	女性	19.33 (標準)	11	無
F	20	女性	21.71 (標準)	6	ダンスサークル所属
G	23	女性	20.40 (標準)	4	無
H	20	女性	20.04 (標準)	3	無
I	21	女性	22.31 (標準)	6	無
J	19	女性	16.02 (やせ)	14	無

**実施時期** 2016年6月中旬から2016年7月上旬にかけて実施した。

**手続き** 1人あたり30分から1時間の半構造化面接を行った。面接の過程はICレコーダーで録音し、インタビューと文字起こしは著者本人が行った。インタビューでは、「体重・体型に関する会話についてお伺いいたします」という説明のなかで、fat talkの具体例をいくつか提示し、その後、以下の項目を中心に質問をした。(1)「こうした会話 (fat talk) の内容について聞かせてください。どのような内容がありますか? 具体的に、できるだけたくさん聞かせてください。」、(2)「(fat talkを) よくする相手、よく聞く相手を教えてください。また、その方との関係、親しさ、体型などについて聞かせください。」、(3)「こうした会話 (fat talk) をするきっかけは何ですか? どんな時、どんな場所でこうした会話が起きますか?」、(4)「こうした会話 (fat talk) をしているとき、どんな気分ですか? 率直な気持ちをお聞かせください。また、こうした会話 (fat talk) の利点、欠点、こうした会話をする理由などをお聞かせください」、(5)「(fat talkの) 会話相手によって、感じることは変わりますか?」、(6)「(fat talkに対して) 求める理想の返答はどのようなものですか?」

**分析** 本研究では、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2007)を用いて、以下の手順を実施した。(1)分析テーマと分析焦点者を設定し、データの関連個所に着目した。データの関連個所を具体例として解釈し、他の類似例についても説明可能な「概念」を生成した。概念の生成の際には、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、具体例を記入した。分析ワークシートの作成例は、表2に示す。(2)データから他の具体例を探し、分析ワークシートのヴァリエーション欄に追加した。具体例が豊富に出ない場合には、概念を有効でないと判断した。また、類似例だけでなく対極例についても検討し、恣意的な解釈とならぬように努めた。(3)概念の生成と同時に、概念同士の関連について検討し、カテゴリ・グループを生成した。(4)カテゴリ・グループを精緻化していくなかで、モデルを作成した。すべての分析と考察の過程は時系列に理論的メモ・ノートに記録し、データから新たにカテゴリが生成されず、カテゴリ間の関連がまとまった時点で理論的飽和に至ったとし、分析を終了とした。

**倫理的配慮** インタビューの実施に際して、研究の趣旨および個人情報の保護方法、途中撤退の権利等に関する書面を用意し、参加者と研究者が同一の書面を見ながら、口頭での説明を実施した。説明ののち、署名による同意 (インフォームド・コンセント) を得た。本調査は、お茶の水女子大学倫理委員会の承認を得て実施している (2016-20)。

表2. 分析ワークシートの作成例

概念名	世間話
定義	世間話のひとつとして、fat talkに従事すること。
理論的メモ	世間話のひとつとして、会話を使う。使いやすい話題。すべらない話題。
ヴァリエーション (具体例)	G54 友達だと、よく出てくる会話の一つみたいな感じで、なんか、「お天気いいね」みたいな、まあそこまでじゃないんですけど、 <u>世間話的な</u> 感じで、よくある会話なので、話もしやすいし、別に聞いててもそんなことないよーって感じで流せるっていうか
	G56 あとはなんか本当に、 <u>会話が</u> ないときに「最近太った」みたいな感じですかね。
	H20 あ、でも、普通に。さっき言ったみたいな、食べ物について？食べ物のカロリーがどうか、まあなんか、 <u>世間話</u> ？世間話っていうか、自分の個人的な話っていうよりも、なんか、 <u>あるあるネタ</u> みたいな感じで。
	J42 ただその場の、なんか、 <u>話の盛り上げとかのつもり</u> で言ってるのかもあるかなって思います
	D32 みんな多分共通したものは、意識はもってるから、理解は得やすいのかな？という感じがするので、すべらない、じゃないですけど、 <u>使いやすい話題</u> ではあるのかなあとと思いますね。
	C28 なんか、話のネタが尽きてしちゃうとか。 <u>世間話</u> みたいな感じとしてはしたりするんですけど、別に、そんな、真剣には。
	A85 なんかあの、 <u>一種の社交辞令</u> になりつつある感じがするので、高校生だとか、大学生だとかっていう若い女の子の間では、「今日は暑いね」みたいな勢いで、「最近太った」っていう言葉が出ちゃうと思うので、

## 結果

得られたデータを分析したところ、最終的に17の概念が生成された。これらから、9つのカテゴリ、5つのカテゴリ・グループが生成された。概念及びカテゴリの一覧を表3に示し、以下に各カテゴリについて説明する。以下、概念は〔 〕、カテゴリは { }、カテゴリ・グループは【 】で示す。

**場所** 「食べ物が目の前にあるだとか、これから食べるだとか、いうときであったり(A32)」、「体育とかでジャージ姿とかを見ると、ああ最近運動してないね…みたいな、見て思いましたりとか(G24)」のように、食べ物、洋服などの「視覚刺激」をきっかけに会話が起こる場所と、「友達とかだと本当に、きっかけとがなく、思いついたら。(C34)」というように、視覚刺激のない【どこでも】会話が起こる2つの場合に分けられた。

**会話の背景** 会話の背景として、〔世間話〕や〔近況報告〕としてfat talkに従事している{表面的会話}の場合と、〔悩み相談〕や〔デリケートな話題〕である{深刻な会話}の場合があることがされた。〔世間話〕の場合、「よく出てくる会話の一つみたいな感じで、お天気いいねみたいな、世間話的な感じで、よくある会話なので、話もしやすいし…(G54)」「ただその場の、なんか、話の盛り上げとかのつもりで言ってるのかもあるかなって思います(J42)」「一種の社交辞令になりつつある感じがするので、高校生だとか、大学生だとかっていう若い女の子の間では、今日は暑いねみたいな勢いで、最近太ったっていう言葉が出ちゃうと思うので、(A85)」といったように、共通の無難な話題という特徴がみられた。一方で、「焦ってるから多分口に出しちゃうんだと思うんですよね。(G34)」のように、実際に悩んで、〔悩み相談〕としてfat talkに従事している場合もあり、こうした場合は〔デリケートな話題〕という性質をもちやすく、「深刻になりかねない(A63)」、「結構気を遣っちゃう内容(G18)」と感じられていることが示された。

**会話相手** 主な会話相手としては、友人、親などが含まれたが、〔体型〕と〔親しさ〕により会話の性質が異なった。「例えば、ダイエットの話をするときに、こう、見るからに太ってる人とかと、ダイエットの話はしづらいですね。(E59)」というように、会話相手の体型により、会話の内容が変化するようであった。また、「仲のいい人じゃないと言えないかな。(J52)」、「身近な人の場合だと、(…)、前より太ったんじゃない？みたいなことを気軽に言えて、ばれた？みたいな感じで、ちょっと冗談っぽく返せる相手なら言えるんですけど、まだあんまり親しくない人とか、(…)あんまり触れない感じがあります。(G12)」というように、親しい相手とは話せるが、親しくない相手とは話さないという傾向がみられた。

**fat talkを聞くことの影響** 周囲のfat talkを聞くことによる影響は、〔不快〕〔気疲れ〕〔仲良くなれる〕〔無感情〕

[やせ願望] といった5つの概念から構成された。[不快] [気疲れ] は【会話の背景】における [デリケートな話題] という性質と関連したネガティブな影響であるが、「自分の欠点を話すのって、お互い話すので、結束が強くなる (E69)」という例にみられるように、[仲良くなれる] というポジティブな影響も存在していた。一方、「そんなに深く考えてないだろうなって思うし、そんなに深くは、重くは捉えない (B29)」というように、ポジティブでもネガティブでもなく、[無感情] という反応もみられた。さらに、これらの反応に加えて、「気にしたほうがいいかなって思います (I30)」「私もそうかもしれないって自分を反省する (G41)」という例にみられるように、[やせ願望] への影響があることが示唆された。

**fat talkへの返答とその影響** fat talkのなかでも「最近太った」「太った気がする」といった発言に対する返答には、[太っていることを否定] するケースが多くみられたが、[太っていることを肯定] される場合もみられた。これらの {返答による影響} は、「そんなことないよ」というように、太っていることを否定された場合には [安心する] が、肯定された場合には [傷つく] という場合があることが示された。

**生起プロセス** 以上の生成されたカテゴリを、カテゴリと概念の相互関係を示す結果図を図1に示す。【会話の背景】において、{表面的な話題} としてfat talkに従事している場合には、聞き手は [無感情] が、{深刻な話題} としてfat talkに従事している場合があるため、[仲良くなれる] 一方で、[不快] な気分や [気疲れ] を引き起こすのではないかと考えられた。また、こうした【fat talkへの返答とその影響】および【fat talkを聞くことによる影響】には、{会話相手} の [体型] や [親しさ] が影響していることが示唆された。

表3. カテゴリ・概念一覧

カテゴリ・グループ	NO.	カテゴリ名	定義	NO.	含まれる概念
場所	1	視覚刺激	視覚刺激によりfat talkが起こる	1	視覚刺激
	2	どこでも	視覚刺激がなくfat talkが起こる	2	教室・登校中等
会話の背景	3	表面的会話	世間話、場を持たせる会話としてfat talkに従事している場合	3	世間話
	4	深刻な会話	深刻な悩みが背景にあり、悩みを口にだすようなかたちで、fat talkに従事している場合	4	近況報告
				5	悩み相談
				6	デリケートな話題
会話相手	5	体型	会話相手となる友人の体型	8	体型
	6	親しさ	会話相手となる友人との親しさ	9	親しさ
fat talkを聞くことの影響	7	会話を聞く影響	fat talkを聞いたことによる気分、思うこと	10	やせ願望
				11	無感情
				7	仲良くなれる
				12	不快
				13	気疲れ
fat talkへの返答とその影響	8	返答	fat talkへの返答	14	太っていることを否定
				15	太っていることを肯定
	9	返答の影響	fat talkへの返答により得られる効果や気分	16	安心する
				17	傷つく

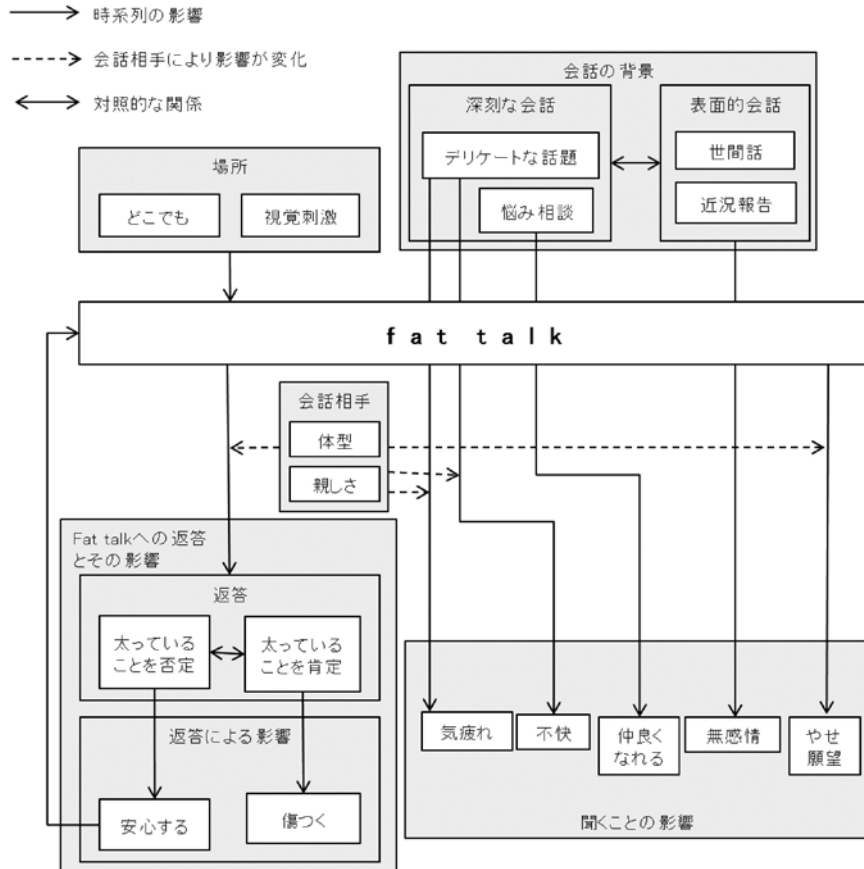


図1. カテゴリと概念の相互関係

### 考察

本研究の目的は、fat talkの生起プロセスについて質的方法を用いて探索することであった。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにもとづいた分析の結果、fat talkの生起する場所が視覚刺激の有無により、生起背景が深刻な会話と表面的会話に分類されることが示唆された。多くの場合はfat talkに従事した結果、会話相手から返答が得られる。返答により、太っていることを肯定された場合には傷ついてしまうが、太っていることを否定された場合には安心が得られ、次のfat talk従事への動機となる可能性があることが示された。また、fat talkを聞くことの影響に、不快感や気疲れがあることが示された一方で、何も感じない場合や、仲良くなれるという効果、やせ願望への影響があることが示された。

#### fat talk従事・暴露によるやせ願望への影響

結果より、生起背景にかかわらず、fat talkへの従事および接触は、やせ願望を引き起こすことが示唆された。tripartite influence model (Thompson et al., 1999) における社会文化的要因と同様に、fat talkは瘦身理想の内面化や社会的比較を通して、身体不満や食行動異常へと影響を及ぼすのではないかと考えられる。

#### fat talk従事の背景と聞き手への影響

分析の結果、fat talk生起の背景として、{表面的会話} の場合と、{深刻な会話} の場合があるようであった。以下に、それぞれの場合におけるfat talk生起とその後の反応について考察する。

表面的会話としてfat talkに従事している場合、よく出てくる会話の一つ、天気の話のような世間話などの、共通の無難な話題という特徴がみられた。これはNitcher (2000) のfat talkは儀礼的会話 (ritual talk) であるという指摘と一致する。こうした場合、fat talk従事者は会話について深く考えておらず、盛り上がる話題としてfat talkに従事していると考えられる。実際に、話を盛り上げるつもりで、コミュニケーションの一環、仲良くなるためにしていると述べられており、盛り上がり、仲良くなれる会話であることが伺える。こうした側面

は先行研究における仲間の結束を強める機能 (Nichter, 2000) といった指摘とも一致している。

一方で、実際に [悩み相談] や [デリケートな話題] として fat talk に従事している場合もみられ、周りに太っている人がいるのに話されると気を遣うという例もあった。fat talk がデリケートな話題であるという性質が聞き手の不快感や気疲れを引き起こすことが示唆された。また、こうした不快感や気疲れは会話相手との親しさによっても異なると考えられる。「私は太っている」という発言を冗談であるか謙遜であるか判断できず、反応に困ると話す参加者にみられるように、相手の求める返答について考えることにより不快感・気疲れを起こすこともあるが、親しい友人の場合には、発言の意図を汲みやすいために気疲れはしないようであった。このように、会話相手との関係性により不快感に差がみられた。

以上のように、fat talk 従事には大きく2つの背景があることがうかがえた。しかし、fat talk が起こった際に、会話内容には変化がみられない。そのため、聞き手は、話し手がどちらの背景で会話をしているのかを見極めかねる場合に、気疲れを起こしやすいのではないかと考えられる。fat talk は女性たちの間で頻繁に起こる会話であることから (Nichter, 2000)、頻繁に気疲れや不快感を経験してしまう可能性があり、気分や精神的健康に対する負の影響が懸念される。実際に、fat talk は抑うつ傾向 (Arroyo & Harwood, 2012) との関連が明らかになっており、fat talk への従事を減少させることで、こうした負の影響を軽減できるのではないかと考えられる。

#### fat talk への返答とその効果

インタビューから、多くの場合 fat talk に対して、「そんなことないよ」というように、太っていることを否定する返答がなされているようであった。こうした返答は、話し手の安心感につながっており、実際に、気が楽になるといった具体例がみられる。しかし、一時的に身体不満や関連した不安がおさまる一方で、先行研究では fat talk への従事が身体不満を高めることが明らかになっており (Ousley et al., 2007; Salk & Warren et al., 2012; Sharpe et al., 2013)、長期的な身体不満が懸念される。fat talk の負の影響に関する心理社会的教育・介入の取り組みは、繰り返される fat talk への従事を止めるのに役立つであろう。

#### 本研究の限界点と今後の展望

本研究では、インタビューを実施した。実施の際はニュートラルな表現での質問や、回答を誘導しない等の配慮を行ったが、参加者は研究者からの期待や要求を感じていた可能性がある。また、本研究は、日本人女子大学生を対象に調査を実施し、参加者の平均年齢は20.00歳 ( $SD=1.34$ ) であった。参加者に関する限界点は、以下の3点である。第一に、参加者の年齢の偏りが考えられる。本研究の知見は、Nichter (2000) による10代女子における fat talk 従事背景の知見を拡張しているが、他の年齢層への一般化には限界がある。今後様々な年齢層によって調査が行われることにより、fat talk に関する理解が深まるであろう。第二に、参加者の体型の偏りである。本研究の参加者のBMIはほとんどが標準であり、やせが2名であった (1名のみBMI24.97と過体重に近い体型であった)。本研究の結果では、会話相手および話し手の体型により会話内容や影響が異なることが示された。今後、やせ・肥満のサンプルにおいて調査が拡張されるべきであると考えられる。第三に、参加者のボディイメージの個人差が考えられる。本研究では、参加者のボディイメージに関して調査を実施しなかったが、参加者自身のボディイメージは、fat talk に対する関心の有無や、fat talk 生起背景の [悩み相談] へとつながる可能性がある。今後調査を実施する際には、参加者自身のボディイメージについても考慮する必要があるだろう。

本研究により、fat talk は身体不満に関する悩みを表現する会話であるだけでなく、世間話・儀礼的会話であり、会話相手との社会的関係に関連して性質が異なることが支持された。儀礼的会話という性質は fat talk 特有の重要な要因であると考えられる。世間話として日常的に fat talk に従事・暴露することにより、身体不満および関連疾病といった問題へのリスクを高めるだけでなく (Ousley et al., 2007; Salk & Warren et al., 2012; Sharpe et al., 2013)、抑うつ (Arroyo & Harwood, 2012) 等の精神的健康への悪影響をもたらしてしまう。こうした fat talk に特徴的な要因に関する理解を深めることにより、我が国におけるやせの問題や身体不満・摂食障害の予防・介入の取り組みに対し、有効な示唆を行えるのではないかと考えられる。

#### 引用文献

Arroyo, A., & Harwood, J. (2012). Exploring the causes and consequences of engaging in fat talk. *Journal of Applied*



- Communication Research*, 40, 167-187.
- BodyImage3D. (2013) Fat talk free® week. Retrieved from <http://bi3d.tridelta.org/ourinitiatives/fattalkfreeweek>
- Engeln, R., Sladek, M. R., & Waldron, H. (2013). Body talk among college men: Content, correlates, and effects. *Body Image*, 10, 300-308.
- Garnett, B. R., Buelow, R., Franko, D. L., Becker, C., Rodgers, R. F., & Austin, S.B. (2014). The importance of campaign saliency as a predictor of attitude and behavior change: A pilot evaluation of social marketing campaign fat talk free week. *Health Communication*, 29, 984-995.
- 半藤保・川嶋友子 (2009) 女子大学生の体型とやせ願望 新潟青陵大学紀要, 1, 53-59.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
- 木下康仁 (2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法 富山大学看護学会誌, 6, 1-10.
- 厚生労働省 (2015). 国民健康・栄養調査 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000106405.html>
- 甲村弘子 (2010). 若年女性のやせと骨粗鬆症 臨床婦人科産科, 64, 1275-1279.
- 松坂かすみ・中山和子・古屋美知・山内理沙・高松和永 (2013). 女子学生における栄養摂取量とやせ願望について 高知学園短期大学紀要, 43, 9-15.
- Mukai, T., Crago, M., & Shisslak, C. M. (1994). Eating attitudes and weight preoccupation among female high school students in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 677-688.
- 中井義勝 (2003). Eating Attitudes Test (EAT)の妥当性について 精神医学, 45, 161-165.
- Neumark-Sztainer, D., Paxton, S. J., Hannan, P. J., Haines, J., & Story, M. (2006). Does body satisfaction matter? five-year longitudinal associations between body satisfaction and health behaviors in adolescent females and males. *Journal of Adolescent Health*, 39, 244-251.
- Nichter, M. (2000). Fat talk: What girls and their parents say about dieting. Cambridge, MA; Harvard University Press.
- 荻布智恵・蓮井理沙・細田明美・山本由喜子 (2006). 若年女性のやせ願望の現状と体型に対する自覚及びダイエット経験 大阪市立大学生活科学研究誌, 5, 1-9.
- Ousley, L., Cordero, E. D., & White, S. (2007). Fat talk among college students: How undergraduates communicate regarding food and body weight, shape & appearance. *Eating Disorders*, 16, 73-84.
- Paxton, S. J., Neumark-Sztainer, D., Hannan, P. J., & Eisenberg, M. E. (2006). Body dissatisfaction prospectively predicts depressive mood and low self-esteem in adolescent girls and boys. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, 35, 539-549.
- Payne, L. O., Martz, D. M., Tompkins, K. B., Petroff, A. B., & Farrow, C. V. (2011). Gender comparisons of fat talk in the United Kingdom and the United States. *Sex Roles*, 65, 557-565.
- Rodin, J., Silberstein, L., Striegel-Moore, R. (1984). Women and weight: A normative discontent. *Nebraska Symposium on Motivation*, 32, 267-307.
- Rose, A. J. (2002). Co-rumination in the friendships of girls and boys. *Child Development*, 73, 1830-1843.
- Rudiger, J. A., & Winstead, B. A. (2013). Body talk and body-related co-rumination: Associations with body image, eating attitudes, and psychological adjustment. *Body Image*, 10, 462-471.
- Sharpe, H., Naumann, U., Treasure, J., & Schmidt, U. (2013). Is fat talking a causal risk factor for body dissatisfaction? A systematic review and meta-analysis. *International Journal of Eating Disorders*, 46, 643-652.
- 重田公子・笹田陽子・鈴木和春・櫻村修生 (2007). 若年女性の瘦身志向が食行動と疲労に与える影響 日本食生活学会誌, 18, 164-171.
- 曾我部夏子・丸山里枝子・佐藤和人・五関一曾根正江 (2009). 大学生におけるボディ・マス・インデックスと食生活および骨量との関連性について 栄養学雑誌, 67, 58-64.
- Stice, E., & Shaw, H. (2003). Prospective relations of body image, eating, and affective disturbances to smoking onset in adolescent girls: How virginia slims. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71, 129-135.
- Stice, E. (2002). Risk and maintenance factors for eating pathology: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, 128(5), 825-848.
- Stice, E., Schupak-Neuberg, E., Shaw, H. E., & Stein, R. I. (1994). Relation of media exposure to eating disorder symptomatology: an examination of mediating mechanisms. *Journal of Abnormal Psychology*, 103, 836-40.
- Stone, L.B., Hankin, B. L., Gibb, B. E., & Abela, J. R. Z. (2011). Co-rumination predicts the onset of depressive disorders during adolescence. *Journal of Abnormal Psychology*, 120, 752-757.
- Striegel-Moore, R., & Bulik, C. M. (2007). Risk factors for eating disorders. *American Psychologist*, 62, 181-198.
- Thompson, J. K., Heinberg, L. J., Altabe, M., & Tantleff-Dunn, S. (1999). *Exacting beauty: Theory, assessment, and treatment of body image disturbance*. Washington, DC, US: American Psychological Association.
- Warren, C. S., Holland, S., Billings, H., & Parker, A. (2012). The relationships between fat talk, body dissatisfaction, and drive for

thinness: perceived stress as a moderator. *Body Image*, 9, 358-64.

Yamamiya, Y., Shroff, H., & Thompson, J. K. (2008). The tripartite influence model of body image and eating disturbance: A replication with a Japanese sample. *International Journal of Eating Disorders*, 41, 88-91.